

<来週の聖書から>

【三つのたとえ話】主イエスは、多くの喩で“神の国”を語られましたが、来週の聖書箇所は、その中でも有名なところです。ルカの15章には“失われた羊の喩”、“失われたコインの喩”そしてこの“放蕩息子の喩”があります。15:2に“ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いました」とありますから、これに対する反論の一つになっているのです。問題の中心は“罪人”あるいは“悔い改める一人”の意味が強調されていますから、悔い改めて福音を信ずることが最後まで貫かれています（マルコ1:15）。来週の箇所は、この中の放蕩息子の喩のところですよ。

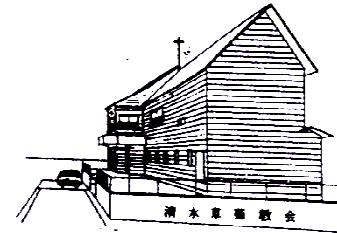
【聖書を読む】まず読む事から始めるべきです。当り前のことのように、**“だいたい聖書の何処に何が書いてある”**ということが分かってくると、反対をしてしまうことがあります。聞いたことがあります、証しの中で“放蕩息子のようであった私が・・・”と語る兄弟がいました。“私は後悔し悔い改め、神に赦され”と経験が語られるのですが、“私の言いたいことのために聖書のこの箇所があるのだ”と、聖書を用いているのです。しかし、聖書は読むものです。私が書いたものではありません。おまけにずいぶん昔に、違う文化の中で、違う言葉で書かれたものなのです。まず読んで、読んでいる私に、何が信仰的にも生理的にも与えられるかを、探らなければならないのです。そこには私の主張はありません。聞こえてくるのは、私の好む事柄とは別の、神様の思いと救いのはずです。

【放蕩息子】この物語に進みましょう。弟は悲惨な生活の中で“父に頼ろう”と決意し、その通りに行きます。“ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と(15:18~19)”。

【兄だって】ところがこの喩で教えられることに兄の存在があります。忠実な息子のように読めそうですが、はたして、父なる神の思いに忠実だったのでしょうか。私たちも、経験する“比較の中で解釈する兄”だったように主は語っておられます。父の弟に対する思いを拒否したのです。この兄にとって“父は力”でした。父に頼って豊かに過ごそうと思っていたところに弟が帰ってきたのです。当然、父は自分の味方をして弟を追い出すか、あるいは、弟の想像通りに奉公人ぐらいの扱いをするものと思っていたのに、自分が受けるべき優しさを、弟に注いでいるのを目の当たりにすることになります。気づくべきは、優劣として考えていた姿でした。父は兄弟を共に招こうとします。聖書にはありませんが、33節の見えることが分かります。“父の思いを知った兄は、失われていた息子と共に、聖餐の恵にのぞんだ”。見つかった銀貨が劣ったものではなかったようにです。

週報

2011年 9月 25日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリースタジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042